



TITLE:

ポスチュアに着目した医療型障害
児入所施設の建築計画に関する研
究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

山脇, 博紀

CITATION:

山脇, 博紀. ポスチュアに着目した医療型障害児入所施設の建築計画に
関する研究. 京都大学, 2017, 博士(工学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13096>

RIGHT:

京都大学	博士（工学）	氏名	山脇 博紀
論文題目	ポスチュアに着目した医療型障害児入所施設の建築計画に関する研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>障がい児の増加と重度化の傾向にある我が国の障がい児支援体系において、医療型障害児入所施設は年々利用ニーズが高まり、同時に在宅に代わる唯一の生活施設として質的整備が求められている。本研究は、理学療法において心身の発達の意義が指摘されるポスチュアに着目し、医療型障害児入所施設に入所する障がい児の生活行動を建築人間工学と建築計画学の視点から考察することで、障がい児の生活空間に適した物理的要件を検討するものである。本論文は、全5章から構成されている。</p> <p>第1章は序論であり、社会的背景を概観したうえで、既往研究調査から医療型障害児入所施設の質的整備に資する建築計画的知見が極端に乏しいことを指摘し、本研究の位置づけを示している。そのうえで目的と課題、調査方法と調査対象、構成を示した。</p> <p>第2章では、身体支持環境の物理的特性を明らかにするため、ポスチュアと障がい特性および身体支持具と空間の構成要素の関係から、ポスチュア選択に係る要因を検討している。ここではまず、調査対象児童 152 名を運動機能の獲得程度によりグルーピングして各児童群のポスチュア比率を分析し、障がい特性がポスチュア選択の自律性と偏向に及ぼす影響を考察している。次いで、アフォーダンスの視点から利用される身体支持具の特性を明らかにしたうえで、空間ごとに身体支持具とポスチュア選択の傾向を分析し、明らかなポスチュアの偏りのある二つのタイプの空間利用特性を見出した。このようなポスチュアによる使い分けの要因として床面の仕上げと空間間の強い境界のデザイン、さらに配置される家具の空間構成要素であることを考察している。さらに、床面仕上げの面積構成が異なる 3 つの施設空間におけるポスチュア比率の傾向を比較し、建築的要因の検討をおこなっている。</p> <p>第3章では、障がい児の生活に適した施設空間の建築計画的要件の基礎的知見を得るため、障がい特性と生活行動と施設空間との関係性を実証的に捉え、障がい児の生活における空間の利用実態を明らかにしている。本章では、生活行動比率と主体条件項目の分散分析から影響要因として運動機能と知的機能の獲得程度を抽出し、この 2 軸によって児童をグルーピングしたうえで、結果の児童群間の違いに着目しつつ考察を進めている。まず、各児童群の生活行動比率の分析から、障がい特性の影響は障がい児の自発的な生活行動に作用し、施設日課的生活行動にはほとんど作用しない点を考察している。次いで、生活行動とポスチュアの対応関係を捉え、生活行動に対する児童の自発性がポスチュア選択に影響を及ぼす要因であることを考察している。さらに、主な利用室のポスチュア選択傾向と就寝機能の有無によって空間を 4 タイプに分類し、それぞれの空間の利用特性を児童群と生活行動およびポスチュアから分析し、使い分けの要因として、施設日課的生活行動と児童の自発的行動との違い、遊び行動の自立性と看視の必要性、安静の必要性などを指摘している。</p>			

京都大学	博士（工学）	氏名	山脇 博紀
<p>第4章では、障がい児の自発性と発達の意義から遊び行動に着目し、遊び行動の運動・動作の側面と他者との社会的関係の側面の二つの側面から、空間の利用実態を明らかにしている。本章では調査対象施設の建替え前と建替え後の調査の比較分析をおこない、空間の構成や設えの変化が遊び行動の変化に及ぼす影響について実証的に考察している。運動・動作の側面から遊び行動による空間の利用特性を分析した結果、遊び行動に利用される特徴的な物理的要素として「空間の広がり」の要素」「遊びコーナー」の要素」「生活基本行動の設え」を挙げ、空間のユニット化が「空間の広がり」の要素」を利用する遊び行動を抑止する要因であること、玩具キャビネットやテレビの設置が「遊びコーナー」の要素」となり、施設日課的行動の空間においても遊びの機会を提供しうることなどを考察している。また、他者との社会的関係の側面から遊び行動による空間の利用特性を分析した結果、年長で障がい児が軽度の児童に職員からの過度な干渉をされない空間選択の傾向が見られること、遊び仲間による専有的で排他的な空間利用が生まれ、自由な空間利用を阻害される児童が生じる可能性があることなどを見出し、共用空間のアルコーブなどの空間要素の有効性を指摘している。</p> <p>第5章は結論であり、本論文で得られた成果について要約している。</p> <p>さらに、発達期の障がい児が暮らす生活空間の計画およびデザインに資する知見として、①障がい児が軽度の児童の自発的なポスチュアとして平座位の重要性を再認識する必要があること、②平座位が多様な遊びの場で展開されるために、ユカザ空間の設定が必要であること、職員から距離をとって遊べる空間的工夫と遊び行動のきっかけとなるコーナー設定が望ましいこと、③本来的な療育機能の提供空間であるイスザの共用空間にも、他律的に椅座位を選択している障がい児に自発的な遊び行動を促す遊びコーナーの設定が望ましいこと、などを挙げている。また、障がい児の生活を支える職員の看護・介護の視点からの検討と、在宅からの入所と在宅への退所を考慮し、在宅の住様式との連続性の視点による検討を課題として挙げている。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、障がい児の発達の意義のあるポスチュアを通した身体と建築との相互作用に着目し、医療型障害児入所施設の生活空間化を実現するための計画およびデザインに資する知見を実証的な研究に基づいてまとめたものであり、得られた主な成果は次のとおりである。

1. 建築計画学の分野において、重度障がい児の環境行動を実証的に捉えることは障がい児に起因する行動の特異性により困難を有するが、著者は長年にわたる継続的な施設および調査対象児童との関りを通して日常生活場面における行動観察調査をおこなうことで障がい児の視点から生活の質に関する議論を可能にしており、希少性も合わせて評価できる。
2. 心身機能の障がいにより生活行動の自立性が低下した障がい児の環境行動の実態把握にポスチュアという分析視点を持ち込むことで、身体と建築の物理的要素との直接的な応答関係を明らかにしている。ここでは心身機能障がい児がポスチュアの自立的変換を困難にする要因であることを指摘したうえで、道具としての身体支持具、空間の境界のアフォーダンス、家具による様式性などの多層的なポスチュア選択の要因を明らかにしている。
3. ポスチュアと生活行動の対応関係の分析を通し、特に自発性の高い遊び行動による空間利用特性に着目することで障がい児による施設空間に対する意味付けを考察し、運動・動作の側面と他者との社会的関係の側面の両面から発達に寄与しうる遊び行動の空間のあり方について論じている。今後、より多くの知見の蓄積を必要とするが、障がい児の施設型ではこれまで論じられていない新たな知見として十分に有用性がある。
4. 事例研究による知見ではあるが、空間構成とケア方針に先駆的な取り組みの施設を対象として障がい児の生活行動を実証的に捉え、発達を支える環境のあり方に向けた提言として障がい児の療育施設の現場へ知見を還元しており、実践的な点が評価できる。

本論文は、詳細な行動観察調査に基づいて障がい児の生活実態を把握・考察し、医療型障害児入所施設が生活施設であるための建築計画学上の知見を明らかにしており、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年2月20日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。